

全国歴史研究会主催 熊本大会参加紀行

岡山歴史研究会 所属 山崎泰二

1. 法被の効果

今年の熊本大会は岡山から 14 名の参加があり新幹線下車ホームから、昨年の白河大会で好評戴いた、岡山観光コンベンション協会の揃いの法被で大会二日迄着用して行動した。式典会場に登場すると、あちこちで善意に満ちた歓迎の歓声を戴いた。会場だけでなく、道行く市民の方やホテルでの朝食時など見知らぬ方から声が掛った。二日目以降の見学会（観光）でも同じであった。



大会翌朝参加者に配付された熊本日日新聞の記事

高梁中井出身のビジネスマンは高梁高校時代を懐かしく「岡山のどちら？」と聞かれ偶然に同席した同窓の仲間と会話が弾んだ。若い青年に見えたが定年に近いとのこと。香川から仕事で来た建設技術者は、隣県の誼（よしみ）で、日本の技術力まで会話が繋ぎ、若い青年の力強さに感心した。

集合写真を見た吉成主幹（本部主宰者）が「岡山集団が輝いて写っている」とお世辞ではない

言葉を戴いた。「500 円のクリーニング代は自弁」と知り「これだけ観光宣伝をしているのに・・・ね」と何度もそんな声も耳にする。

2. 岡山大会の評価

前々会の岡山大会に参加した方からも声を掛けて戴いた。本部会員で今回も我々の世話をいただいている、阪本花子氏（神奈川）はその後個人的に岡山を再訪し、「野崎豊さんにお世話になった」「お礼を伝えて・・・」とのこと、傍にいた山本氏が携帯で野崎顧問を繋ぎ坂本女史と声の再会を果たしてもらった。来年の大会では直接の再会を約束していた様子。

茨城の男性からは、一人で総社界隈を探訪していたら、地元の方に軽トラで次の目的地まで案内してもらい、「歴史好き」の合言葉で偶然の出会いでの親切には痛く感動したと、我々にお礼を託された。別の方からは、多少の不安を持ちながら岡山駅に到着すると、会場まで多くの地元の方が歓迎のプラカードで案内されたことや、見学会の訪問先には、待機していた地元の専門家の説明が「今でも残像に残っていて、嬉しかった」とこの法被のお陰で、私以外の仲間にも声を戴いた。

広島の有田正之助氏は「隣県でありながら岡山の歴史の深さを知らなかった」早速仲間を誘って岡山を案内できた。と誇らしげであった。高知の哲郎氏は岡山大会のスナップ写真の何枚かをまとめて持参して戴き、写真を見ながら思い出を語り合った。足摺の銘菓＝つばきの岬も美味しかった。

熊本大会に参加出来なかった当時のお世話いただいた多くの岡山の仲間へ改めて感謝し、水面下で皆さんの気持ちが伝わっていることを伝え報告しておきます。

3. 新たな動き

たまたま山田方谷六代目の末裔である野島透氏は財務省九州財務局長として、この熊本に赴任なさり、祝宴に来賓として参加され、岡山

会員が壇上に上がった時、マイクを渡し「山田方谷NHK大河ドラマ化」のスピーチをお願いした。その席には河合継之助研究家の小名泰弘氏（埼玉）も方谷の応援を戴き、竹本弘子女史（本部・徳島）は岡山出身だから当然壇上に。最後に那須洋子（倉敷児島）さんの発声で「桃太郎」の合唱が会場湧かせた。

見学会では県立装飾古墳館の学芸員（お名前を失念）の方が造山古墳（岡山市）の隣、千足古墳の発掘担当者は旧知の仲とのこと、古墳時代から今日まで熊本と岡山の繋がりを感じました。宮本武蔵の紹介は「岡山の武蔵」であって、姫路の話は出なかった。（最近姫路説が台頭）そんなところに、いやに気になった。

本部会員で岡山歴史研究会設立時からお世話を戴いている、荒濱茂（長崎）氏は大会運営で多忙の中、村山三枝子氏が予め寄贈していた五島列島の本のことに感動され、ドンザの会の冊子にも寄稿して頂く事になった。村山女史とも固い握手をなさり、長崎県人魂が通じているようだった。

熊本大会に参加した岡山の14名はもとより、岡山と熊本が太古の時代から面々と深い繋がりのあることを確認できた記憶に残る大会になりました。次回福井での再会を約して散会した。

2013. 25. 10. 21